

すばらしき“みえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2018.2

202号

■特集／三重の文学碑巡り

●いま、グループネット／鳥羽恐竜研究振興会 ●みえを歩こう／津市 香良洲町



三重の文学碑巡り

水車
 げんすふろさへ けつたとき
 まだその水ぐるまを まぼといた
 ゆれいも 向うは げくつしな
 とくに さんハマしよていて
 ゆりりやろ
 薄のちろで
 まわつていた
 伊藤桂一

緑豊かな山々、青く輝く海、山と海をつなぐ川の清らかな流れ、そして各地域で懸命に生きる人々の姿…。三重県内を旅すれば、思わず感嘆の声をあげたくなる光景に出合います。
 時には、心に留めた印象を、詩歌や俳句として結実させた方もいるのではないのでしょうか？

今回は、三重県とゆかりがあり、美しい詩や手紙などを残した文化人を顕彰して建立された文学碑を紹介します。それぞれの文学碑を巡れば、意外な誕生秘話や、地域の人々との交流の様子なども垣間見えてくることでしょう。

※三重県内には、ほかにも数多くの文学碑が存在します。今回紹介するのはほんの一部です。

取材・文…中村真由美
 撮影…梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

一度きりの奇縁から誕生した「桑名の驛」

中原中也 (1907-1937) 詩碑

【桑名市大字東方】



中原 中也詩碑

三重県の北の玄関口「桑名駅」は、JR東海の関西本線、近鉄の名古屋線、養老鉄道の養老線が乗り入れていることから、多くの乗降客で賑わいます。日々、駅を利用する中で、1番線ホームに建

つ、大きな詩碑に気付いた方もいることでしょう。台座を含めると2・1メートルに達する碑を見ると、「桑名の夜は暗かった 蛙がコロコロ鳴いてみた 夜更の驛には驛長が 綺麗な砂利を敷き

詰めた プラットホームに只獨りラン
プを持って立ってゐたと、詩の1連目と、作者名が刻まれていることがわかります。

詩のタイトルは「桑名の驛」。そして作者は、近代詩人・中原中也です。明治40(1907)年に山県県で生まれ、京都で学生時代を過ごした後は、主に東京で詩人として活躍した中也ですが、桑名との関わりがあったのでしょうか？そこには、あるできごとがあったのです。

そのできごとは、昭和10(1935)年の8月11日に起こりました。中也は妻と長男との3人で、帰省中の山口から



詩碑の下部には詩の全文が記されたプレートが設置されている。

東京へと列車で帰る途中でした。しかし、関西地方では、前日の夜から降り続いた豪雨のために、大阪と京都間で列車の運行が不能になっていました。このため、中也たちを乗せた東海道線の上り列車は、関西本線を経由することになった。夜中に桑名駅に停車したのは、まったくの偶然だったのです。

「桑名の夜は暗かった」と、何度も繰り返したのは、賑やかな様子を想像していた中也が、実際の駅の静かさとの落差に驚いたからでしょう。

「と教えてくれるのは、郷土史家の西羽晃さん。長年、郷土の歴史を探索する西羽さんは、中也には東海道の宿場町として賑わう桑名についての知識があった筈だといいます。それは詩の2連目の「焼蛤貝の桑名とは 此処のことか」と思ったから駅長さんに訊ねたら…」と



除幕式に出席した皆さん※



詩碑製作者の吉村 壽夫さんのアトリエ

驛」の詩碑を建てたいと考えたといえます。そこで有志を募り、「中原中也『桑名の驛』詩碑建設委員会」を結成。こうして平成6年、桑名駅の開業百周年記念に合わせて、除幕式が行われました。式には、中也の弟夫人、当時の「中原中也記念館」(山口県館長も同席し、盛大なものとなりました。

「赤御影石の形態で、詩人として短い生涯を情熱的に生きた中也の詩心を表現しました。また、曲線と直線の対極表現で、車輪と開業百年という歴史の重みを具現化しています」と話すのは、国画会会員の彫刻家、吉村 壽夫さんです。詩碑製作の意図をアトリエで熱く語ってくれました。

「桑名駅」を利用する際は、東京方面を向いて建つ、詩碑をじっくりと眺めてみてはいかがでしょうか。

お問い合わせ

桑名市文化協会
(桑名市経済環境部商工観光文化課内)
TEL 0594-224-1361

※印の写真は取材先から提供していただきました

故郷への溢れる想いが集約された「水車」

伊藤 桂一 (1917～2016) 詩碑

【四日市市寺方町】



伊藤 桂一詩碑

28年に99年の生涯を終えた伊藤桂一です。

「平成21年の満92歳の誕生日に、生家の大日寺で詩碑の除幕式を行った時には、桂一夫妻も出席してくれました」と教えてくれるのは、志水雅明さん。日本文藝家協会会員の志水さんは「四日市・伊藤桂一顕彰委員会」の会長も務めます。同会は、詩碑建立の後、会報紙「水車」を発行するなど、多彩な顕彰活動を続けています。



会報紙「水車」

丹羽文雄(1904～2005)、田村泰次郎(1911～1983)、近藤啓太郎(1920～2002)は、いずれも四日市市出身の作家として知られ

ますが、加えて忘れてならないのは、昭和37(1962)年に「螢の河」で直木賞を受賞したほか、時代小説・詩・短歌など、幅広いジャンルで活躍し、平成

を含めると1メートル程度。少し丸みを帯びた文字を見ていると、自然と優しい気持ちになってきます。

「ぼくはふるさとへ帰ったときにまだその水ぐるまをおぼえていたけれども向うはぼくのことなど、とくに忘れてしまっていて、ゆるり、ゆるり薄のなかでまわっていた」

「文字は、自筆を拡大したものです。生前、仏の桂さんと称された人柄を彷彿させるでしょう」と話す志水さんからは、謙虚で温厚な桂一を偲ぶ想いが伝

わってきます。

ところで、奈良時代創建とも伝わり、高さ3.14メートルを誇る大日如来坐像(市指定有形文化財)が安置されるなど、由緒ある寺の長男として生まれた桂一が、作家・詩人としての道を歩むことになったのは、なぜなのでしょう。それは、一家を襲った、ある不幸なできごとが発端でした。大日寺の住職だった父の玄信が、不慮の事故で亡くなったしまったのです。桂一がわずか4歳の時でした。そのため、残された家族

は3年後に寺を出ることに。その後、戦争体験などを経て、主に東京で長く生活した桂一でしたが、故郷への想いは色あせることはなかったようです。「日帰りの旅」「帰郷」などの作品には、帰郷した際



「小説に描かれた大日寺」

の複雑な心情を綴りました。当時、寺の近くにあった水車についても記されています。その内容は、「四日市・伊藤桂一顕彰委員会」会員の加納俊彦さんがまとめた「小説に描かれた大日寺」に詳しく紹介されています。

「どんなジャンルでも、桂一の作品には、自然の風景・草花・何気ない音などの情景が描かれているのが特徴です。少年のころに見聞きした、三滝川の流れや、寺の裏側にあった竹藪、参道に咲く彼岸花などの豊かで繊細な色彩や音に育まれたからなのでしょう。志水さんのお話を伺いながら詩碑の側面を眺めていると、青く澄んだ水の流れが現れたような気がしました。

お問い合わせ

「四日市・伊藤桂一顕彰委員会」
TEL 059-326-11970

(志水雅明会長)



大日寺本堂



詩碑の除幕式に出席した伊藤 桂一夫妻※

祖母の言葉「おいなされ」と「彼岸花」の印象を認めた手紙

小津安二郎(1903~1963) 記念碑 [津市大門]



映写機をイメージした形の小津 安二郎記念碑

日本三観音の一つに数えられる、恵
日山観音寺は、全国から広く信仰を集め、
「津観音」と呼び親しまれます。境内に
は、観音堂・五重塔・鐘樓堂・護摩堂

などが並び建つ中、平成27年に新たに
建立されたのが、映画監督・小津安二
郎の記念碑。3月に行われた除幕式に
は、女優の山本富士子さんも駆け付け、

安二郎記念碑建立委員会(現在は「彼岸
花映画祭実行委員会」)会長の田川さん
のお話通り、祖母・都志は、現在の津市
美杉町の出身で、津中心部で茶業を営
む中條家に嫁いでいました。少年時代
の小津は、祖母の元を度々訪れ、当時
境内にあった映画館で映画を鑑賞した
といいます。

そして手紙とは、昭和2(1927)
年に、久居(現津市)の陸軍歩兵第33連
隊に短期入隊した際、祖母の家に寄っ



津観音



除幕式の様子※

のワンシーンのようです。
なお、最後に添えられた句
の彼岸草とは、この時に
電車から見て、印象に残っ
たヒガンバナのこと。日
本映画大学学長で、日本
を代表する映画史家の佐
藤忠男氏は、31年後の昭
和33(1958)年に発表
された初のカラー作品の
題名『彼岸花』は、この時
の記憶に根差したものだ

関係者とともに
完成を祝い
ました。

小津 安二

郎と三重県と
のゆかりとい
えば、たとえ
ば、10歳のこ
ろから家族と
暮らした松阪
市愛宕町や、
旧制宇治山田中学校(現宇治山田高校)
で学生生活を謳歌した伊勢市、同校卒
業後の1年間を代用教員として過ごし
た松阪市飯高町が知られていますが、
津市とも関わりがあったのでしょうか？



小津 安二郎が足繁く通った映画館を模した
「小津安二郎青春館」(松阪市愛宕町)
TEL0598・22・2660(金・土・日・月曜日開館)

「実は、小津の母方の祖母が津観音近
くに住んでいて、度々訪れていたのだ
です。しかも、祖母のことを書いた手紙の
内容が、映画『彼岸花』に深く関係してい
るのです」と教えてくれるのは、田川
敏夫さん。平成26年に結成された「小津

と、『小津安二郎の芸術』に著しました。

多感な10代を三重県各地で過ごした
小津は、大正12(1923)年に上京す
ると、映画監督の道を歩み続け、54作品
をこの世に送り出しました。そして、
昭和38(1963)年12月12日に、その
人生に幕を降ろします。奇しくも、満
60歳の誕生日でした。

小津映画に対する評価は、死後数十
年経った今でも衰えることはありません
。平成24年には「東京物語」(1953
年)が、英国映画協会が10年に1度開催
する「世界映画史上トップテン」で1位
に輝くなど、世界中で高く評価されて
います。田川さんは、親子の情愛・人間
同士のつながりなど、普遍的なものが描
かれていたからだと教えてくれました。
「世界のOZU」の足跡を辿るなら、
津観音へも足を運んでみてはいかがでしょうか。

お問い合わせ

「彼岸花映画祭実行委員会」事務局
TEL080・3647・4460

※印の写真は取材先から提供していただきました

鳥羽の漁村で医者として過ごした詩人の代表的作品「安乗の稚児」

伊良子 清白 (1877-1946) 詩碑 (鳥羽市小浜町)



「安乗岬園地」内に建つ伊良子 清白詩碑

「志摩の果安乗の小村 早手風岩をどよもし」…「安乗の小さな村で、岩がどよめくほど急に激しく吹き起る風の描写から始まる詩のタイトルは「安乗の稚児」。作者は、伊良子 清白です。明

治39(1906)年刊行の詩集『孔雀船』を代表する詩を刻んだ詩碑は、現在、県内に2基あります。

1基目があるのは、詩の舞台となっている志摩市阿児町安乗。国の登録有

自然と人間の対立、融和の絶唱は、未来永劫いついつまでも、人の心をとらえてはなさない(後略)という文面からは、詩とともに清白を誇らしく想う気持ち伝わります。

さらにもう1基を訪ねて、鳥羽市小浜町へ。小浜漁港に到着すると、陽の光を浴びて輝く海面に、ぽっかりと小さな島々が浮かび、一幅の画のようです。めざす詩碑は、近くの城山に鎮座する八幡神社へと続く階段を登った先にある、「水底の泥を逆上げ かきにごす海の病、そ、り立つ 波の大鋸 過げとこ



鳥羽市小浜町に建つ伊良子 清白詩碑



「伊良子 清白の家」(国登録有形文化財)

形文化財「安乗埼灯台」が建つ、「安乗岬園地」内です。志摩市文化財調査委員の尾崎 亥之生さんにお話を伺うと、清白は、実際に安乗を訪ねて作詩したのではないとのこと。それでも4連目の「荒壁の小家一村 反響する心と心 稚子ひとり恐怖をしらす ほ、ふみて海に對へり」では、安乗の漁村の厳しい生活や、それにも関わらず沖に出ている両親と心が通い合ってニコニコしている乳飲み子の描写が、まるで実際の光景のようだと話します。なお、「稚児」ではなく「稚子」とあるのは、『孔雀船』の初版の表記によるものと教わりました。

また、裏面の撰文は、清白の二男で作家の伊良子 正が記したものの、「(前略)

れた清白は、以来、昭和20(1945)年に、現在の大紀町に疎開するまでの23年間を小浜の地で過ごしたのです。そして翌年、往診に向かう途中で病に倒れ、帰らぬ人に。生涯を終えたのも、県内だったのです。

「小浜の集落内で過ごした清白の住宅兼診療所は、現在『伊良子 清白の家』として、市内『マリナーパーク』にあり、ファンの方などが訪れています」と話すのは、鳥羽市教育委員会の文化財専門員である豊田 祥三さん。豊田さんからは、清白が医者として真摯に患者と接していたと同時に、詩壇の第一線から身を引いても、詩歌への情熱を持っていたことなども教わりました。

この春は、清白が愛した県内各地を巡ってみたいかがでしょう。

お問い合わせ

鳥羽市教育委員会生涯学習課
TEL 0595-12511271
志摩市教育委員会生涯学習スポーツ課
TEL 0599-144103339



「安乗埼灯台」

見事な風景と人々の営みを歌った一節が導く「五ヶ所湾小唄」

野口 雨情 (1882~1945) 詩碑 [度会郡南伊勢町]



「南海展望公園」入口近くに建つ野口 雨情詩碑。

第13節「綺縹(きりょう)のよいの(ぢや)礫(れき)の育ち 情深いは伊勢氣質(かたぎ)」

数々の詩や童謡、そして民謡を世に送り出したことで知られます。中でも「七つの子」「十五夜お月さん」「青い眼の人形」などの童謡は、年齢に関係なく口ずさめる歌として、多くの人々に親しまれています。

大正時代を中心に数々の童謡を生み出し、北原 白秋(1885~1942)、西條 八十(1892~1970)とともに近代童謡の基礎を作った雨情は、同10(1921)年ごろになると、全国各地を訪れ、その土地で民謡を作るようになっていきます。五ヶ所湾を訪れた際には、毎日毎日、各地に向いて、実際の風景を見聞きし、作詩したといわれています。移動には主に自転車や舟を利用したのですが、時には、土地の若者たちが担ぎ手となり、籠(かご)で山道を駆け上ることもあったと伝わります。こうして、17節で構成された「五ヶ所湾小唄」が誕生しました。

時は流れ、雨情の来訪から74年が経った平成22年、南伊勢町役場前に「五ヶ所

南伊勢町の東側一帯に広がる五ヶ所湾は、リアス式の海岸線が複雑に入り組み、その様子がまるでカエデの葉のように見えることから、楓江湾(ふうかうわん)とも称されます。昭和11(1936)年、この

風光明媚な五ヶ所湾を、ある詩人が来遊しました。野口 雨情です。

野口 雨情(本名 英吉)は、明治15(1882)年に茨城県で生まれ、昭和20(1945)年に64歳で永眠するまでの間に、

湾小唄」の第7節「五ヶ所蜜柑の色づく頃にや 雨も黄金の色に降る」が刻まれた詩碑が建立されました。高さ約1.2メートルの碑のすぐ近くには、南伊勢町の木でもあるミカンの木が植えられています。ところで、町内各地をドライブしていて、所々で似たような自然石の詩碑に気付いたことがある人もいるでしょう。中には大きさや素材が違

最後を「このことは、日本で野口 雨情の詩碑のいちばん多い町の誕生と、南伊勢町が誇り高い文化の町へ発展することを意味する。願わくは、人びとこぞって雨情殊玉の詩碑をくちずさまれんことを」と締めくくっています。なお、15基の内の第4節「こは五ヶ所 愛洲の城址 聞くもなつかし物語」を刻んだ碑は、昨年12月に「愛洲の館」敷地内に移設されました。

うものもありますが、これらは、昭和59(1984)年に、礫浦地区に第10節を記した碑が建てられたのを皮切りに、各地区に建てられ、役場前の碑で15基となったのです。そのことは、詩碑の傍らに建つ石碑にも詳しく説明してあり、

う」と話すのは、エッセイストで三重大学社会連携特任教授の川口 祐二さん。長年、同町の文化振興に携わってきた川口さんの言葉からは、町民であることを自負する想いが伝わります。やがて季節は、水温(みづぬる)むころ。この春は南伊勢町を旅してみたいかがでしょう。野口 雨情の心を動かした風景と、人々の営みが刻まれた詩碑が、道案内してくれるかもしれません。

お問い合わせ

南伊勢町教育委員会事務局

TEL 0596-77-0002

南伊勢町観光工課

TEL 0599-66-1501



南伊勢町役場前に建つ詩碑



切原の白滝近くに建つ詩碑
第7節「山にひびいて白瀧さへも水はくだけで花と咲く」



内瀬(ないせ)地区に建つ詩碑
第16節「空の月さへ内瀬の湾の浜の小舟の中に照る」

鳥羽恐竜研究振興会

平成8年、鳥羽市安楽島町の砥浜海岸の崖の中から恐竜化石が発見されたことをきっかけに結成。以来、「鳥羽竜」化石発見の地の研究、情報発信、体験活動の学習の場の提供などを中心に活動しています。



向かって左から、事務局の大川 千恵美さん、事務局長の山下 直樹さん、理事の江崎 満さん。

お問い合わせ

「鳥羽恐竜研究振興会」事務局
鳥羽市鳥羽一丁目10-48
(鳥羽市歴史文化ガイドセンター内)
TEL 090-4790-0559

三重県内で活動するグループを紹介する「いま、グループネット」。今回は「鳥羽恐竜研究振興会」をご紹介します。この日は、恐竜の骨化石発見現場で、事務局長の山下 直樹さんに夢とロマン溢れる話を伺うことができました。

——私たちは今、恐竜化石が発見された砥浜海岸にいますが、当時の状況を教えてください。

山下：平成8年の7月、貝化石採集に来ていた研究者4人が偶然見つけて、県の教育委員会に連絡したのが始まりです。この海岸の地層は、中生代白亜紀前期(1億3800万年前)に形成さ

れたと考えられていて、貝化石が多い場所として知られていましたが、崖の一部に恐竜のような骨化石の断面が見えたことから、県と鳥羽市が大型化石発掘調査団を結成しました。この時、市民も参加しようと結成したのが「鳥羽恐竜研究振興会」です。

——皆さんが力を合わせて発掘調査した結果、大発見につながったのですか。

山下：そうです。同年の10月から始まった調査の結果、特定できた部位は、左右の上腕骨・左右の大腿骨や尾椎など12点です。その中で一番大きなものは右大腿骨で、保存部位の全長は128センチメートルもあります。当時の日本で、これだけ大きく、一頭分の恐竜化

と思われました。

——会の皆さんは、イグアノドン類の足跡化石の保護活動に加えて、体験学習なども積極的に行っていますね。

山下：イグアノドンは草食性恐竜の中でも二足歩行ですが、この足跡化石は「鳥羽竜」の2年後に発見されました。新たな恐竜化石発見に、驚きました。実は今日は、たまたま本物の足跡化石を見ることができですが、崩れやすいために、いつもは保護して見えないようになっています。そのため、パール

ロード沿いに整備した小公園に「鳥羽竜」の大腿骨化石と、この足跡化石のレプリカを常設して、子どもたちにも触ってもらえるようにしてあります。

体験学習は、夏休み期間中を中心に、「化石レプリカづくり体験教室」「夏休み盛りだくさん体験活動」「化石採集と海浜生物の観察会」を開催しています。実は「鳥羽竜」にはまだ学名がありませんが、もし、化石採集体験の最中に、歯か頭骨の化石を発見できれば、学名に発見者の名前を付けることも可能です。

ぜひ、鳥羽の子どもたちに発見してもらいたいものです。

——ありがとうございます。山下さんからは、最後に鳥羽・志摩・伊勢地域を「ジオパーク」(地質学的に貴重な地形などを備えた自然公園)として整備する構想についても教わりました。こうした活動を通して、鳥羽の子どもたちにもっと地域のことを知ってもらい、自慢してほしいの、想いも伝わりました。

インタビュー：中村 真由美



イグアノドンの足跡化石



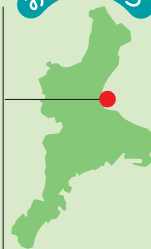
化石採集体験参加の子どもたちへの事前説明※



「鳥羽竜」の右大腿骨化石(左)とイグアノドン足跡化石のレプリカ



「化石レプリカづくり体験教室」※



美しい三角州の町を一周

津市

香良洲町

津市の東南に位置する香良洲町は、伊勢湾へと注ぐ雲出古川と雲出川によって形成された三角州の町。地図で確認すると、扇を広げたように見事な三角形を描いているのがわかります。面積は、わずか39キロ平方メートルですが、老松が生い茂る公園、伊勢湾沿いに続く白砂青松の海岸など、変化に富んだ景観が見られます。また、天照大神の妹神を祀る香良洲神社や国登録有形文化財の酒店など、歴史ある名所もあり、見ごたえ十分です。今回は、香良洲町内をぐるっと一周します。

取材・文：中村真由美

香良洲神社から香良洲海岸へ

今回の旅の起点は、津市香良洲総合庁舎近くの「サンデルタ香良洲」駐車場です。トンガリ帽子のような屋根が目を引き施設には、図書館や多目的ホールなどが揃います。公共交通機関を利用する場合は、近鉄・JR「津」駅前のバス停「津駅前」から三重交通バスに乗り、「香良洲総合支所前」か「香良洲神社前」で降りるとよいでしょう。

「近くに『津市香良洲歴史資料館』があ



「サンデルタ香良洲」



「津市香良洲歴史資料館」(月曜日休館)
TEL059-292-2118



香良洲神社本殿

りますから、寄っていきましょう」と案内されたのが、東海地方でも数少ない「戦争と平和」をテーマにした資料館。ここでは、かつて多くの若者が航空機搭乗員としての基礎訓練を受けたという、「旧三重海軍航空隊」関連の資料を見ることが出来ます。

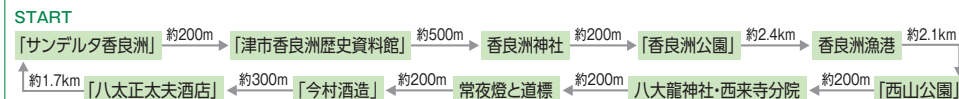
勢神宮の「式年遷宮」の翌年、平成26年に建て替えられたばかり。「式年遷座」と呼ばれます。前年には「お木曳行事」も行われ、境内の「香良洲神社資料室」(要予約TEL059-292-3905)で、行事の際に身にまとう装束などを見ることが出来ました。

また、8月15日の夜から16日の未明にかけて境内で行われる「宮踊り」(別名かんこ踊り)は、氏神様に豊作を感謝祈願する奉納踊りで、香良洲の夏の風物詩となっています。



今回の案内人は、「香良洲ガイド～矢野路」の濱村 隆通(たかみち)会長と、会員の奥田 菊子さん。同会では、ボランティアガイドに加えて、町内の歴史を掘り起こし、次世代へと語り継ぐ活動を積極的に行っています。

■ 行程図 所要時間／約3時間30分 ※所要時間は、おおよその目安です。





道標



常夜燈(右)と道標

西来寺分院もたずんでいました。
八大龍神社に手を合わせ、住宅地の
中へと入っていくと、すぐに大きな常
夜燈に気が付きました。周囲には道標
も建ち、「からす道」の文字などが読み取
れます。香良洲道は、伊勢参宮街道の
脇道の一つ。かつてはお伊勢詣らば可
良須(香良洲)に詣れ、可良須詣らば片
参宮ともいわれ、伊勢神宮への参拝の



「今村酒造」店内に掲げられた看板

前後に、香良洲神社を詣るために、
多くの人々がめざした道なのです。
「香良洲は小さな町ですが、かつては
2軒も造り酒屋がありました。『今村酒
造』は、昔ながらの味を今も守り続けて
いますよ」とのお話で、まず「今村酒造」
を訪ねます。万延元(1860)年創業
の同店では、歴史の重みを感じる看板
を目にすることができました。そして
もう1軒は「八太正太夫酒店」。現在は
醸造は行っていませんが、建物の多く
は明治時代に建てられ、平成25年に主
屋など4棟が、国の登録有形文化財と
なりました。



趣のある蔵などが並ぶ「八太正太夫酒店」

香良洲神社で神聖な気分になった後は、東へ進みます。数分で「香良洲公園」に到着。園内には、見上げるほどの松の巨木が並び立ち、独特の景観となっています。ここは、古くは香良洲神社の神領地だったと教わります。
根元がぐっと持ち上がった松などに圧倒されながら歩くと、堤防の先に広がる海が望めました。香良洲海岸です。潮干狩り時期には家族連れなどで賑わう海岸に沿って、約2キロメートルの堤防が続き、この日は、さざ波の音を聞きながらの散策ができました。



「香良洲公園」



松並木が続く「浜堤」

「あそこ松並木がありますが、以前はあの辺りまで砂浜が広がっていたのです」と濱村さんが指さす方向は、堤防から100メートル以上も陸地側です。松並木の方へ移動してみると、光景は一変。少し盛り上がった道の両側に松の巨木が立ち並びます。この趣ある道は「浜堤」と呼ばれ、海の砂礫などが波によって打ち上げられて形成された自然堤防だと教わります。

「香良洲神社へと続く香良洲道」

しばらくの間、「浜堤」で古の旅人気が

分を味わった後は、再び、潮の香りに誘われて堤防を歩きます。突き当たりの香良洲漁港で方向を西へ変えると、今度は川が現れました。町の北端を流れる雲出古川です。「西山公園」や、ヘリポートが設置された「香良洲町防災ステーション」などを通りながら川沿いを歩くと、やがて、木々に囲まれた小さな社が見えました。八大龍神社です。同社には延徳2(1490)年草創で、現在は津市乙部にある西来寺にまつわる「龍神物語」が語り継がれ、地域の人々が守り続けています。また、隣接して



八大龍神社

問 香良洲ガイド「矢野路」

(津市香良洲総合支所地域振興課)

TEL 059-2292-4308

黒と白の壁が印象的な蔵などを堪能し、途中で、香良洲梨の畑などを眺めながら、「サンデルタ香良洲」へと戻ります。自然と歴史が凝縮した香良洲一周の旅は、これで終了です。なお、バスを利用の場合は、本数が少ないため、事前に確認するとよいでしょう。

※印の写真は取材先から提供していただきました

三重 の シンボル

三重県

三重県内の市町などが、それぞれの特徴を象徴する存在として選定している
木・花を紹介します。



県の木
神宮スギ



県の花
ハナショウブ

■ お問い合わせ ■

三重県 戦略企画部 広聴広報課 企画・広聴班 TEL 059-224-2031

*ご愛読いただいていた「三重彩時記」を202号からリニューアルしました。

*次回から、市・町名の50音順に紹介します。

*シンボルを選定していない、もしくは鳥や魚などを選定している市町も一部あります。

表紙写真 野口 雨情 詩碑(度会郡南伊勢町)

百五銀行 丸之内本部棟内の「歴史資料館」で、「すばらしき“みえ”」のバックナンバーをご覧ください。

☎ 経営企画部広報CSR課 TEL 059-223-2326(要予約)